

大学の一般教育に関する意見調査

宮井 敏

同志社大学一般教育研究会のことについては、すでに代表者の中桐大有文学部教授から本誌第七号（昭和三十八年十二月）であらまし紹介済みであるが、この研究会は「大学における一般教育の本質と役割」というテーマを掲げて、昭和三十七年、各学部有志二名宛の構成で発足し、昭和三十七年の人文科学研究所よりの研究助成金、昭和三十九年の京信財団科学奨励金の援助をうけて今日まで研究調査をつつて来た。この間、大学の一般教育についての討議をすすめる一方、一般教育関係資料の蒐集、調査、他大学との合同討議、

大学設置基準改善要綱の検討などを行なっているが、その計画の一部として昭和三十九年六月に本学学生二、三回生二千名を対象として、大学の一般教育についてのアンケートを実施した。いづれ公式には別の機会に調査用

紙全文、統計表とともに分析結果が発表されるであろうが、なにぶん膨大なものであるので、ここではそのうちから一般的に問題のありそうな点にとどめてまとめてみた。大方の御意見をまっ次第である。

*

まず、一般教育全体について興味をもてたかどうか、という問に対して「まったく興味がもてなかった」とするものは全学的にみて意外に少なく、経済学部は12%を最高、商学部の4.5%を最低にして平均8.2%であり、その反面、「一般教育について全般的に興味があった」とするものが、工学部の13.5%を最高、経済学部の6%を最低にして平均8.4%であり、わずかながら後者が上まわっている。しかし、全体としてみれば、全般的に興味をもてた者が全部の一割以下で、大部分のもの

が部分的にしか興味をもてなかったと答えている事実は充分注目し値しよう。以下項目別に興味のあり方をさぐってみることにする。

興味をもてた科目についてその理由を調べてみると、「いままで知らなかったことを教えられたから」「教養をたかめることが出来たから」「担当者がよかったから」という項目が各学部とも最も高い数値を示している。最初われわれは調査に先立って、巷間しばしば云々されるように、若い世代の直接的な効用意識が、「専門科目の勉強に役だちそうない気がしたから」「社会にでてから役だちそうに思ったから」という項目にあらわれて来るものと予想したのであるが、実際の数字の示すところでは、むしろ素朴な知識欲の充足や教養主義が根強くのこっていることがわかつ



大学生協書店の風景

た。また今一つ、全学的に「自分の問題意識にぴったりに合致したから」興味をもてたとする者が目立っていたが、受講者の側には想像以上に自発的な学習意欲が潜在していることを思わせるものがある。この点から教育が、教育者のみでなく、被教育者である学生の自

発的意欲を実践の軸として展開されるべきだという意見も生れて来るものとおもわれる。また興味をもてたのは担当者がよかったからだとする者が多い。この「よかった」という表現の中には担当者の説得力、熱意、個性、学識などいろいろな要素が含まれていよう

が、担当者が受講者の興味を刺激し、従って潜在意欲を開発する上に大きな要因となっていることがうかがえるのである。調査表末尾にかかせたフリーセンテンスの欄でも、この問題にふれた記載がとくに多かったようである。

*

次に一般教育の中で興味のもてなかった科目についてその理由を調べてみると、数字の高い項目は工学部は別として、「自分のもっている問題意識になにも答えてくれるものがないかったから」「担当者に熱意が感じられなかったから」および「クラスが大きすぎたから」という三つに集中している。とくに最後のクラスサイズの項目が全学部を通じてトッ

プに立っていることは重要であろう。本学的場合、この問題については従来から種々検討がなされて来ているのであるが、やはりこのことが受講者の興味をつよく阻害していることがうかがわれる。もっともクラス編成の問題には、傍聴の制限、着席整理、私語の禁止などの措置が登録人員の制限と共に工夫される必要があるとおもわれるが、大阪市立大学のWUS(大学問題研究会が昭和三十八年に行なった一般教育についてのアンケートでも、一般教育科目を不満とするいろいろな原因の中で「人数(受講者)が多すぎる」という項目が目立っていたようである。もちろん、すべての科目が小クラス、ゼミ形式という訳にはゆかないであらうが、一般的興味も勉学意欲も問題意識も、すべて大クラスの喧噪の中に埋没してしまうというのであれば、やはり可能なかぎりの工夫をつくす必要があるようである。また興味のもてなかった理由の中でいささか予想外であったことは、「一般教育科目が高校でならったことばかりだから」とする者がおおむねほとんどなかったことである。一般教育科目が大学生にとっておもしろくないのは、「高校の科目のくり返しだからだ」

(毎日新聞社説 昭和四十年四月) (朝日新聞社説 昭和四十年四月) とする世評がある

のであるが、この集計表の結果では受講者には必ずしもそうは受けとられておらず、前記大阪市大の調査でも、不満の原因を「講義内容が高校の授業の延長だから」とする項目がそれほど高い数字を示していないことも符合するようである。あるいは、きわめて皮相的な觀察から「一般教育は高校の科目と似たようなものだから面白くないにちがいない」とする見方がむしろ大学外、いや学生以外のところで底流しているのかもしれない。もしそうだとすれば、友松芳郎関西大教授(科学史)の提案のように(第三一回近畿地区一般教育協議会、シンポジウムから)「一般教育の科目名には高校で使われた科目名を用いない」というのも一つの工夫であろうか。なお、この項で工学部のみに「登録制度のために好きな科目がとれなかったから」興味をもてなかったのだとする者が集中している点は注目に値しよう。もしこのことが、基礎教育科目や低学年次の専門必修科目などのために自由選択制が圧迫されている結果によるものならば、この点一考の余地があるようである。

*

さて、われわれは第二番目の問題として一般教育科目設置制度について尋ねてみた。現行の三系列から三科目ずつ計九科目三十六単位をとるというやり方について、まず総単位数三十六単位を多すぎるとした者が少なすぎるとした者を上回っているが、圧倒的大多數が現行の単位数をそのまま肯定している。これは京都大学が行なった調査(「大学の一般教育に対する社会的要請の調査・研究」京都大学教育学部紀要、一九六四)の中で、一般教育三系列の総単位数について、大学卒業生の66.5%が現行を適当であるとしているのとも符合する。従つてこの点については今回の大学設置基準改善要綱のうち、一般教育科目の実質的単位減の措置は、一般教育科目を修得中のもの、修得したものの意向に反していることになるわけである。また工学部においてのみ、現行総単位数を少なすぎるとしたものが多すぎるとしたものを上まわっているのは、前述の理由によるものであろうか、大方の教示を待ちたい。また経済学部では、総単位数を多すぎるとしたものの数が他をひきはなして高い数字をみせているが、これは第

一番目の間で一般教育について全く興味もてなかったとする者の数が一番多かったこととだいたい符合するようである。

*

つぎに現行では三系列中からそれぞれ三科目づつ登録履修することになっている制度に對しては、大多數が系列のワクを越えて好きな系列からとりたいたいと望んでいる。すなわち経済学部の69%を最高、工学部の54%を最低に、平均60%が自分ののぞむ科目を系列のワクをこえてとりたいたいと希望していることがわかる。そしてその理由としては、ふつう予想されるように「自分の専攻科目に役立てたいから」自由に登録したいという効用意識からの希望はごく僅かであり、むしろ、ワクを越えてとりたいたいと記入した者の平均74%は「専門と関係なく自分の個性を生かしたいから」そうしたいのだと答えている。このことははじめのべた「教養をたかめることが出来たから」おもしろかったという項目が効用的な実利意識よりもはるかに高い数字を示していたこととあっているわけである。

おなじ登録の問題について、何を基準に選択したかという問をみると、まず圧倒的

に多い答は「科目に対する興味」の項に集中している。ついで「担当者に対する期待」が各学部とも平均して目立っているが、こゝでも他律的要因よりは意外に素朴な学習意欲がみられる。おもしろいのは「先輩友人の意見による」としたのは圧倒的に文学部に多く、また工学部では「担当者に対する期待」という項目が異常に少ないことである。前者の場合は女子の在籍者が多いために他の助言を求めがちな傾向があるのではないかということ、細分された専攻組織が上下左右の人間関係を密にし、従って意見の交換がスムーズになっっていることが想像されるし、後者の場合は学部の性質上、学生一般の他学部との交流が少なく学内ニュースが入りにくく、全般的に担当者一般に対する知識が伝わりにくいいためでもあろうか。いづれにせよ、それぞれの特徴が個性的に出ている興味深いものがある。なお「自分の時間の都合」「クラブの時間の都合」などという項目はこれも予想に反してほとんど問題にならないほどの数字であった。

＊

つぎに全般的な科目設置のあり方、つまり

一般教育科目の年次配当について尋ねてみた。一般的には現行の一、二年次配当、一部専門科目混合型を肯定するものが圧倒的に多いが、各学部の履修制度がまちまちであり、低学年次における専門科目の設置年、設置数については随分さまざまのパターンを示しており、履修制度についての意見、希望もそれを反応して出ているようである。

最後に、一般教育科目の中での科目指定制度について、とりわけ宗教学必修制度についての意見を見ると、神学部全員がこの制度を肯定しているのは或る意味で当然としても、全体としては必修の必要なしとするものが肯定するものを上まわっている。ただ肯定する者が全体の38%にのぼること、そしてその肯定の理由として「キリスト教主義の学校だから」という安易な肯定よりは「宗教に対する理解が深まるからだ」とする方がはるかに上まわっていることは充分に注目に値することとおもわれる。

さて、以上であらましの問題点をとり上げてみたが、ここに上げなかった項目や、質問表末尾の自由記載欄の意見をふくめてまとめ

てみると、おおよそ次のようになるものと考えられる。

一 はとんどの学生がつよい勉学意欲をもって真面目に勉強したいと願っているようである。実用主義的な要求は意外に少なく、功利意識もさのみ目立っておらず、むしろ教養主義的な傾向が感じられ、一般教育に対して素朴な期待感があり、その意義もかなり正しく把握しているようにおもわれる。

二 多数の学生が現状に不満を抱いており、教育内容や制度のあり方についての批判が多い。

三 教育が教員の手でのみ行なわれるのではなくて受講者の自発的意欲もまた十二分に引き上げられるべきだとする意見が多かったようである。

こうした学生の側からの一般教育に関する意見、批判、希望はもちろん直ちにそのままを是とするのは危険であるが、受講者側の意見として充分に検討されるべきであろう。今後さらにこれらを資料としてふまえつつ、大学の一般教育のあり方について研究調査をすすめてゆきたいと念願している。

(商学部助教授・英語)

大学生と一冊の本



「ファウスト」のジャケット
とゲーテの胸像

大学の過剰と貧困

大学で学ぶことの意義の一つは、多くの価値を発見し、自分の人間性を深く形成することとでなければならない。高校時代に受験用の知識の学習に追われて、学芸の世界に本質的なものを求めることを忘れ、その為に疎外された人間性を自覚的に回復する為に開かれた多元的価値の共同体が大学なのである。

ところが大きな希望を抱いて入学した大学では、大学の大量増設とマス・プロ教育によって、学問や教育の質的低下が目立ち、更に「女子学生亡国論」などが唱えられたりして、いまや新制大学は発足以来十七年目にして、大きな危機に直面している。そこには大学の本質に触れる幾つかの重要な原因がある筈だ

が、その一つは現在七五九校を数え、世界第三位の大学国となった日本の大学の過剰からくる大学の貧困ということであろう。

大学の本質は University の語源とその理念が示すように「学問による教師と学生の共同体」(Universitas Magistrarum et Scholarium per Scientia)「大学の自由」によって貫かれた学の真理の殿堂である。ところがジャーナリズムによって、大学の危機が叫ばれるという事は、大学の自由と学の權威を守るべき教授や学生の在り方に、何か重大な過誤があるからであろう。いくら我々が大学の自由を声高く叫んでみても、この独自の自由を本質つける思想や学問が貧困であって、それは空虚な響きにすぎぬ。大学の自由を規定する最高の本質は、大学を支配する思想学

志賀英雄

問の真理でなければならないからだ。「真理による自由」や「真理への自由」のほかに大学における真の学問の自由はないのである。

ところが世論は、七五〇校を越える大学の過剰からくる大学のアカデミズムの喪失、教授陣の質的低下、学生の勉強心及び倫理意識の貧困、などをあげて鋭い大学批判を試みている。私はその責任の大半は、短期大学が負うべきものだと思うが、いわゆる駅弁大学、いや最近では各駅大学とまで揶揄されるに至った四年制大学にも、その責任がないとは言えない。したがって大学はこれらの批判を卒直にうけて、大学の栄光の名を回復するため、反省期に入らなければならない。そのためにはまず、大学教育を支える教師たちのアカデミズムへの自覚と、人間性の教育について

の反省から出発しなければならぬ。そこで私は私なりに、大学教授二十年生の自覚と反省に立って、私の講義に出席する延べ千名を越える大学生が、何を求め、何について考えているかを知らうと思った。教授は学び求める者の実態を知って、自分の講義の構想や方法を周到に立てなければならぬ。そうでないと講義は独善的となり、学生にとって魅力のないものになってしまう。しかし私の聴講生は全学部に亘り、その専門がそれぞれに違うので、ファスト博士のように学部的一切を究めるどころか、理解することさえできない。それで私は私が担当する教職専門科目と教育学教室に出席する学生を対象とし、彼らに共通の主題について考えた結果、「私の一冊の本と一枚の名曲レコード」を、アンケートの題目とし、これにリポート形式で答えてもらうことにした。これらの学生は——多少の例外はある筈だが——いつかは教壇に立ち、読書の意義について語る教師となる人々であるから、彼らの読書体験は特に注目されてよい、と考えたのである。

ところがこの試みについて、ある教授は、「近頃の学生は、すぐに大学の自由とか、自

治などを一人前に主張するが、教科書以外の本など、殆ど読んでいないのではないか。いや教科書さえも買おうとしない者がいる。」と歎き、それでいてレジャー用の贅沢品はかなり売れているという。これに対して学生は、「浪人までして入学した大学では、マンモス教室でのマイク講義の毎日で、勉強する意欲はおきず、講義の内容もテキストの棒読みが機械的に続くので、出席するのが嫌になる。」と批判する。このように教授と学生の両方から、互いに大学を否定し合うような発言がなされ、「学問の殿堂」はいまや教育不在の「知識の百貨店」となり、学士という人間商品の生産工場に転落してしまった、と極論する者もでてくる始末である。これでは確かに大学の危機と言わざるをえない。いまこそ大学人は協力して、大学の栄光の座の回復のために、何をなすべきかを慎重に考え、その結論にしたがって行動すべき時だと思ふ。

本の中の世界に生きる者

新制大学の特色は、旧制大学のように「學術の中心として学問の奥義を極める」ことにあるのではなく、幅の広い豊かな教養と専門

常識を身につけた人間の形成を目差す点にある。そのために大学生は、自分の人間性の形成に必要な新しい価値の発見に努め、大学の学問の全体系ではなく、学問探求のメトードを学ぶべきである。メトードさえしっかり学べば、学問の体系へのアプローチは自らできるものである。メトードなき体系は盲目なのだから。それと共に学生は、大学とは与えられるだけではなく、価値を求めて、自由に自分を形成してゆく最高学府であることを知らねばならぬ。そしてその大学的自覚の一つの形態が、とりも直さず読書による自己形成なのである。大学においては形成とは深く読書することであり、厳しく思索することであるからだ。

カールライルは「大学の存在は書物によってその基礎が変革された。すべての教授が、我々のために最善をつくしたとしても、すべては我々の読書にかかっている。現代における真の大学は図書館である」と言い切っている。もちろんこれは極論であるが、図書館なき大学は設備としても成立しえない。大学は書物の体系の上に成立する学的機関であり、一日も本を欠くことのできない学問共同

体であるからだ。したがって教授と学生にあって、書物は真理に生きるための毎日のパンである。本の中の世界に生きることによって、我々大学人は「理性人」(Homo Sapiens)であると共に、書物なしに生きることが欲しない「読書人」(Homo Liber)である。私自身も書物のない豪壮な邸宅よりも、書物に囲まれた小さな小屋を選ぶであろう。真理はこの本小屋の中に溢れているからである。

それでは大学生たちは、どんな本を毎日のパンとし、「私の一冊の本」として何を選んだのか。まず一冊の本という題目のうけとり方であるが、人によって一様ではなかった。自分の人間性や思想や世界観を改造した本、たとえば「新約聖書」や「資本論」などから、最も感銘をうけた本、最も好きな本、あるいは最も忘れ難い想い出の本など、さまざまであった。そしてやはりこの「一冊」と言い切った者、一冊に絞ることが難しかったと訴えた者、どうしても二冊あげざるをえない、と答えた者などがあった。

ところがレポートの中には、「私は一冊の本を求められて強いショックをうけた。なぜなら今までそのような意識をもって読書を

したことがなかったからです。」という告白や、「僕は元来読書が嫌いだったので、一冊の本などはない。」と答えがあった。ことに後者の答えには少なからず驚かされた。大学で学問するということは、専門書を読むことによって科学的に思索することである。大学とは、このような学問的思索のメトードを学ぶ、いわば本の中の世界なのだが、読書が嫌いだということは、思索をしないことであり、大学生としての存在性を否定することになる。

このような学生は工学部に最も多く、商学部がこれに次いでいる。そして一冊の本をも持たない者の不幸について語った時、私に反撥したのもこれらの学生たちであった。

しかし、このアンケートによって「今までの読書の仕方について深く反省させられ、私の一冊の本を確かめるため、読み返すことができた。」と答えた誠実な学生も、このほかに多数あった。ところがまたこのアンケートのために、作爲的に答えを準備した者がいる、という投書や忠告を幾つかうけた。しかし、これらのものは読めばすぐに解る程度の簡単な記述なので、不採用にした。私もこのことを予想して、書名だけではなく、読書感

想を二千字前後に纏めることを求めたのである。このようにして提出された九一三通のレポートの中から集計した「私の一冊の本」は、別表の通りである。

一冊の本について

私はでき上った集計表によって、同志社大学生にのみ見られる特質といったものを探してみた。そしてその比較分析の手懸りに、「朝日新聞」が三十八年一月二十七日の日曜版に発表した「私の心にのこる一冊の本」と題するアンケート四〇一〇通から集計した「ベストテン」の表をとりあげることにした。まず我々の「一冊の本」のベストテン一五点のうち「朝日」にないものは、書名の左肩に*印をつけておいた。そして本学で最高票をえた「罪と罰」は、「朝日」の「外国文学」の部門では第九位、第五位の「ジャン・クリストフ」が逆に第一位になっている。ただし「朝日のアンケート」では、回答者はサラリーマンが四二・三パーセント、学生が二八・五パーセント、その他となっているので、このことを考慮に入れて比較しなければなるまい。それと今一つ、本学では作者が女性であ

るか、女性を主題とした小説が圧倒的に多いのは、回答者の半数近くが女子学生であったからだ。したがって女子学生の多い文学部の教室では、全学的な一冊の本を調べることはできない。しかし本学には、戦後二十年間にベスト・セラーとなった本は、「風と共に去りぬ」のほかは一冊もない。大学生はやはり価値の定着した古典をまず選ぶ、という正統的な読書観をもっているからであろう。

さてこのレポートを分析してみ、第一に感じたことは、大学生とはいわず、一般の読書人たちの「愛読書のパターン」といったものができているようにみえる、ということである。つまり各社が競って出している「世界文学全集」の中から、そつなく選ばれたという印象が強い。それは切実な思索と体験に即して選ばれた一冊の本という感想が伴っていないのがかなり多いからである。

第二に、九百冊を越える書物の中に、洋書によるものが、英文科生の数冊を除いては全くなかったことである。英文科生が英書を読むのは当然のことだが、独文学や仏文学を読むことは、いまの学生の語学力からみれば、求める方が無理かも知れない。教室における

訳読でさえ心細い状態なのだから。

第三に、学術専門書が余り読まれていないということである。僅かに教育学生のルソーの「エミール」二票と、法学部生のイェーリング「権利のための闘争」とラートブルッフ「法哲学」、それに文学部生の「資本論」と「共産党宣言」と、「空想より科学へ」が文法に一票ずつあっただけ。ただし彭真北京市長、陸平北京大学長の解任に端を発した中共の整風台風の思想上の眼となった毛沢東の「実践論・矛盾論」は、僅かに四票ではあるが、社会科学書の最高位に立っている。しかしこれとても確かなマルクス主義的世界観の自覚において選ばれたかは疑わしい。その理由については後で述べることにする。また国文生の「万葉集」や「源氏物語」「平家物語」などの十票は、教室で講義されたものであり、英文科生のシェークスピアの十票と同様にみてよいであろう。

このようにみてくると、大学生が学術書を読むということとは、卒業論文を書くとき、ということになる。このような読書の貧困は、思索の貧困となり、やがては大学の貧困を来す理由の一つともなろう。集計された一冊

私の一冊の本のベスト・テン

()印は女子学生票

部科名	英文	文化	社会	法	経	商	工	小計	部科名	英文	文化	社会	法	経	商	工	小計
書名	英文	文化	社会	法	経	商	工	小計	書名	英文	文化	社会	法	経	商	工	小計
罪と罰	2(1)	5(9)	2	2	1	2	4	28	*車輪の下	2(3)	2(7)	0	2	0	1	0	17
*狭き門	1(8)	1(13)	(2)	1	1	0	0	27	破戒	(3)	2(5)	0	1	0	3	3	17
聖書	(3)	7(7)	0	2(1)	1	0	3(1)	25	*モーパッサン女の一生	(8)	(5)	(1)	0	2	0	0	16
風と共に去りぬ	(5)	(9)	(4)	2(2)	(1)	0	0	23	*魅せられた魂	(6)	(8)	0	0	0	0	0	14
星の王子さま	1(5)	2(12)	0	1	0	0	0	21	*知と愛	(1)	2(7)	(2)	1	1	0	0	14
大地	(4)	(10)	(1)	3	2	0	1	21	以下次点								
*嵐が丘	(7)	(7)	(2)	3(1)	0	0	1	21	*ファウスト	(1)	2(6)	(1)	(2)	0	0	0	12
ジャン・クリストフ	1(3)	6	1	2(1)	3	2	2	21	次郎物語	2	2(1)	(1)	1(1)	1	0	3	12
出家とその子	1(6)	3(5)	0	4	0	0	0	19									
こころ	2(2)	(7)	0	3	2	0	2	18									
									総計 326 男 119 女 207								

の本の大部分は、すでに高校を出る頃までに読まれていて、大学に入ってから出会ったという例はごく僅かである。したがってこれらの一冊の本も、大学における人間性や思想の成長と共に、今後変わるであろう。「私の一冊の本」を決定するには、まだまだ説書と思索を必要とする者がかなりいるのである。

第四に、リポートの文章についてであるが、多数の中には、まことに稚拙窮乏なものがあって、中学生の作文のような拙文、悪文振りの文章である。論旨や文意不明のもの、表現の正確なもの論理上の主語や述語面での目的語を欠くもの、誤字や当て字は言うに及ばず、送りがないや句読点の打ち方の間違いなど、これが大学生の書く文章か、と歎息せざるをえなかった。何を国語の教室で学んできたのか、と言いたい。英文科生の中には、InterestやMemoryを正確に綴りながら、国字では感心とか気憶と書き、またある者は「登上人物のSetting」などと書いている。ことにこの女子学生の文章など気の毒なほど酷いものであった。しかしまた中には、思想や感情が人々に訴える深さをもちながら、その表現の拙さや誤字の多さのために、却って文章が傷つ

いてしまった惜しいものもあった。総じて大学生の一冊の本としては余りにも無邪気な、と思われる書物、例えばサトウ・ハチローの「おかあさん」、講談社本の「徳川光圀」「十五少年漂流記」「列車時刻表」などを挙げた諸君の文章が、まことに幼稚な拙文であったこと、それとは全く反対に、「資本論」や「共產党宣言」や「実践論・矛盾論」などのような、難解な学術書を挙げた学生の文章もまた、これに劣らぬ悪文であったことは、意外であった。あのような文章を書くようでは、この難書が本当に理解できたのか疑わしい。一般に論理的思索は、言語的思考の上に深まってゆくと思うからだ。

しかしこのような拙文や悪文は、レポート全体からみれば、絶望的なほど多くはない。求められるままに、欣然として、あるいはためらいながら、日ごろ感じ、考え、悩んでいることを、「私の一冊の本」に託して、卒直にまた思慮深く語ってくれた学生が、意外に多かったことを、私は大変に感謝している。それらの中には、苦しかった夏の体験の告白や「このレポートは私が先生にあてた一種の手紙です」と書いて、心境を吐露した女子学

生、あるいは「僕の日記の一部です」とのべて、克明にその技藝を書いた学生がいたのは、その告白の内容に関連して、私は少なからず感銘をうけた。そしてこの種のレポートを書いた学生は、ほかにもかなりいて、その文章も文学的に彫琢された立派なものであった。それだけに私は研究室の机の上に、積みあげられた千通に近いレポートを、毎日講義のあと七時頃まで、一つずつ丁寧に目を通し、誰の手も借りずに一人でこれを集計した。

これらのレポートを読みながら、その中のべられている諸問題について、教師は求められれば心をこめて助言や指導の労をとらなければならぬと思った。大学という学問共同体の中にあつて、意外に多くの大学生が孤独であり、それぞれに彼ら自身の問題を抱えて考え、悩んでいるのである。「教育不在の大学」という批判の声が聞かれる昨今、大学教育を支えるものは真理と愛とによる人間性の触れあいではなければならぬ。ことに独自の学風をもって、人間性の教育に当るわれらの同志社大学をして、教育の真理に属する栄光の学園とするために、この配慮を絶対に欠いてはならないであろう。(文学部教授・教育原理)